広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	移動動詞の格標示に関する日英語比較研究
Author(s)	小林, 亜希子
Citation	ニダバ , 26 : 41 - 49
Issue Date	1997-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048012
Right	
Relation	

論　文

移動動詞の格標示に関する日英語比較研究*

小　林　亜希子

0. この論文では、空間移動を表す動詞の格枠組みに関する諸問題を日本語・英語それぞれについて比較・考察する。移動動詞の格標示は他の意味内容を持つ動詞のそれとは次の点で大きく異なる。(A) 日英語とも、内項である「場所」の格標示に多様性が認められる。[1] (B) 英語においては、同じ意味内容を持つ移動動詞でも対格枠組みをとれるものととれないものの違いが生じる。

1. データ

これらの問題をそれぞれ、データに沿って具体的に見ていく。目的語に現れる「場所」が移動行為に対してどのような位置を占めるかによって様々な移動動詞のとる格枠組みを分類すると以下のようになる：[2, 3]

(1) 起点：動作の始まる場所

a. 東京を / から離れる・発つ： leave Tokyo

b. 車を / から 降りる： alight from the car/ get off the car

(2) 方向性のある移動での経由点

a. 橋を 渡る： cross the bridge

b. 廊下を / で 走る： run (along) a corridor

c. 田舎道を ぞろぞろ歩く： straggle along the country lane

(3) 方向性のない移動での経由点

a. 室内を / で 歩き回る： walk the floor

b. 野原を / で 徘徊する： roam (over) the fields

c. 銀座を / で うろつく： loiter on the Ginza

(4) 基点：回転移動の中心点

a. 角を 曲がる： turn (round) the corner

b. 太陽（のまわり）を 巡る・回る： revolve on the sun

(5) 着地点：移動の最終的な到達点

a. 街に 近づく： approach the city

b. 部屋に 入る： enter the room

c. 東京に 着く： reach Tokyo

初めに (A) について具体例を挙げる：(1)-(3) に見られるように、日本語の多くの移動動詞は目的語にある「場所」を、ヲ格だけでなく、カラ格・デ格で格標示する事も可能である。英語についても同様、「場所」は動詞から対格標示されても、前置詞より斜格を標示されても、どちらでも良い場合が少なからずある。

ヤコブセン (1989) は、この格標示の可変性をとらえ、日本語のこのようなヲ格は対格ではなく場所格の一種であると主張する。同様の議論は森田 (1994) にも見られる。ヤコブセンや森田の主張には、「体言と用言との意味的関係の在り方を類型化したもの」（小池 1994:111）という格の規定が前提としてたてられていると思われる。この考え方は、いわゆる日本語伝統文法では一般的なようである 。しかし実際には目的語の意味は、動詞がその選択特性に従って選ぶものであり、格とは関係ない：目的語に付与される格に限って言えば、格とは動詞と目的語の 'argument structure' のタイプを表すものでしかない。 'argument structure' とは、行為の参加者がその行為とどのように関わるかということである (Ritter and Rosen: 1996)。' 同じ言語の中で argument structure を共有する動詞は、同じ格枠組みを取る潜在的可能性を持っている。どの argument structure に対格標示が認められるのかは言語により異なるために、日英で格標示が異なる一因となると考えられる。例えば、 (5) のような、行為の着地点は日本語では対格標示が認められないので、決して対格枠組みをとることはない。対して英語では対格標示が認められるので、一様に対格標示が行われる。

また、格標示の違いによりニュアンスに違いの生じることもよく指摘される（ヤコブセン 1989, 富田 1993)：例えば、デ格よりもヲ格で「場所」を標示する方が、動作者と場所との結びつきが密に感じられる。しかし、そのようなニュアンスの違いが何故生じるのかはこれまで説明されてこなかった。

次に (B) の問題を考える。例えば、 (3b), (3c) の移動動詞はほとんど同じ意味内容を持つ。日本語においては「うろつく」「徘徊する」、他に「ぶらぶらする」「放浪する」など、あてのない移動行為を表す動詞は全てその行為に関わる「場所」をヲ格で標示することができる。対して英語では、同じ徘徊を意味する動詞がとる格枠組みはそれぞれの動詞で異なる。 (3b) 'roam' の他、 'rove, ramble, wander, prowl, tramp, stroll' は対格枠組みをとることができるのに対し、ほとんど同じ意味の (3c) 'loiter' や、 'vagabond, saunter' などはその行為に関わる「場所」を対格で標示することはできず、必ず前置詞 'on, through, over' などで「場所」の格標示を行う。

同じ argument structure を共有する動詞は同じ格標示をとる、との前提に従うならば、日本語同様、英語の移動動詞も「場所」を一様に対格標示できるはずである。何故英

語においては、(1b),(2c),(3c),(4b) のような例外が生じるのであろうか。

2. 格枠組みの多様性

格標示の可変性は、'Intransitivization' 適用の可能性によって説明できる。Katada(1994) は、Intransitivization を次のように定める。

(6)a. [V (wt) y], x

b. [V], x <---Intransitivization (Katada 1994:69)

※ x = 外項、 y = 内項

wt = weak transitive のマーク

この操作は、'weak transitive' にのみ適用可能である。weak transitive とは、行為の向かう対象へ必ずしも言及しなくても完全な意味を形成することのできる動詞のことである。具体例として 'eat' が挙げられる。

(7)a. John eats an apple

b. John eats (Katada 1994: 63)

'eat' を対象 ('an apple') の消費行為と見なせば、対象の選択は必然的に行われる。しかし、'eat' を、「咀嚼して飲み込む」という行為者自身の運動行為の一種と見なせば、対象への言及は必要ない。よって、'eat' は weak transitive であり、Intransitivization の適用によって自動詞化する事ができる (=(7b))。

Katada (1994) は、この操作は日本語の心理動詞にも当てはまるとしている。心理動詞と比較して、移動動詞は pure intransitive であると Katada は指摘しているが、実際には、移動動詞にも Intransitivization の適用される可能性があると思われる。

(8)a. [走る (wt) y], x 「太郎が 廊下を 走る」

[+ACC]

b. [走る], x <---Intransitivization 「太郎が 走る」

(9)a. [run(wt) y], x 'John runs a corridor.'

[+ACC]

b. [run], x <---Intransitivization 'John runs.'

'eat' の場合と同じく、「走る」'run' という行為は、行為者が「場所」を移動するための行為と見なすことも、早いステップで足を動かす、という行為者のみにかかわる運動と見なすことも両方可能なので、weak transitive である。よって (8b),(9b) のような自動詞化が適用できる。(8a),(9a) において「場所」の情報は必然的であるが、(8b),(9b) においてはその情報は余分なものである：すなわち、(8b),(9b) が「場所」を情報

として含む場合、それらは Vの Adjunct 位置に現れねばならない。付加位置は動詞の格付与の対象ではないので、この位置にある名詞句はその意味特性に従い場所格「で」又は「から」を伴って、英語では前置詞 on, through などを伴って格を標示する。つまり、対格標示される「場所」は Vの Complement 位置に生じ、場所格や前置詞で格標示される「場所」はVの Adjunct 位置に生じているのである。

このように格標示の違いは位置の違いによるものだとすることで、格の違いに伴うニュアンスの違いも説明できる。

(10)a. 太郎は **廊下を** 走った

b. 太郎は **廊下で** 走った

(11)a. John ran **the corridor**

b. John ran **along the corridor**

(10a), (11a) の移動動詞は場所へ及ぼす行為だと解釈されるのに対し ,Intransitivize された (10b), (11b) の行為は、移動と言うよりも行為者自身の運動に注目が移っている。この場合、「場所」は余分な情報でしかないので、 (10a), (11a) に比べ、これらの「場所」は移動の行為、又は行為者との結びつきが薄いと感じられるのである。

また、格標示の可変性が認められない移動動詞の存在についても並行して論じることができる。

(12)a. 太郎は **その橋を** 渡った

b. * 太郎は **その橋で** 渡った

(13)a. John crossed **the bridge**

b. *John crossed **over the bridge**

これらの動詞は weak transitive ではないので、 Intransitivize することができない。

(14)a. [渡る y], x

b. *[渡る], x <--- *Intransitivization

(15)a. [cross y], x

b. *[cross], x <--- *Intransitivization

すなわち、これらの移動動詞は必ずその行為に関わる「場所」を選択せねばならない。その argument structure は日英語いずれも対格性を認められるので、一様に対格枠組みを取る。

このように、 Intransitivization を設定することで移動動詞に頻繁に見られる格標示の可変性やニュアンスの違いを、日英語とも同じ原則に従って説明することができる。

3. 対格性と pure intransitive

次に (B) の問題について考える。(1)-(4) の argument structure は、日英語いずれも対格枠組みを取る潜在的可能性が認められる。日本語はその予測どおり、移動動詞が選ぶ全ての「場所」を対格で標示することができる。しかし、英語においては (1b) (2c) (3c) (4b) のように、対格標示の潜在的可能性にもかかわらず、「場所」に対格を付与することのできない例が少数ながら存在する。

これら移動動詞は 'pure intransitive' であると考えることで問題を解決することができる。

(16)a. *[loiter y], x

b. [loiter], x

(3b) の 'loiter' は、(16a) のような他動詞が Intransitivization の適用を受けて (16b) の自動詞形になったのではなく、初めから (16b) の選択特性しか持っていないのである。従って、「場所」は余分な情報であるので、現れるとすれば V の Adjunct 位置で、前置詞を伴って標示される。

日本語の移動動詞にはこのような pure intransitive は存在しない。よって動詞の表す移動行為に関わる「場所」は全て動詞の内項として選択、対格付与される可能性を持っている。英語に (16b) のような pure intransitive が存在するのは、英語の移動動詞はその意味内容が固定される傾向が相対的に強いからであると考えられる：すなわち、移動にかかわる動詞でありながら、初めから「あてなく歩く行為者の動作」という、行為者のみに注目した意味しか持たない (16b) のような例が英語にのみ存在するために、日英語で格標示にズレが生じるのである。

以上、Intransitivization 適用の可能性を日英語に、pure intransitive shift verb の存在を英語にのみ認めることで、(1)-(4) の移動動詞の取る格標示の問題を説明することができる。

4. 着点指向の移動動詞における格枠組みのズレ

最後に、着点指向の移動動詞の例 (5) について見ていく。これらの動詞は、日本語・英語とも着地点への言及がないと文として完結した意味をなさない。

(17)a. * 太郎は 近づいた。

b. *John approached. [5]

(17) の例より、着点指向の移動動詞はその着点を必ず含まねばならないことが分かるので、これらは weak transitive ではない。内項の選択は必然的である。

(18)a.[近づく　y], x

b. [approach　y], x

[+ACC]

英語では、行為の目指す着点に対し対格性を認めるので、対格枠組みを取ることができる。他方、日本語において動詞は、それが内項として選択する着点に対し対格性を認めることができない。そのような内項は一様に与格「に」で格標示される。つまり、(5) における日英語の格標示のズレは対格性のズレにより生じるもので、(1)-(4) の格標示のズレとは性質が異なる。

このような対格性のズレは、空間移動の着点だけでなく、抽象的な行為の向けられる着点についても同様に見られる。

(19)a. パーティに 参加する：　join the party

b. 人に 尋ねる：　ask a person

c. 権威に 反抗する：　resist the authority

(19) の場合も (5) と同様、日英語の対格性のズレが原因で格標示にズレを生じていると見なせる。

それでは、対格性を認められない内項の着点に一様に標示される、日本語の与格「に」とはどのようなものだろうか。従来日本語の二格は、それの付く内項の意味役割に従い、場所格・位格・被使役格・着点格・依拠格・付着格（小池 1994) など、多種多様に下位分類されてきた。あるいは、直接受動文を作れる二格構文を、作れない二格構文と区別しようとする分析もある（杉本 1991)。格を、それの付く名詞句の意味役割に従って下位分類しても、その格自体の意味・機能を定義することにならない。また、受動化の可否には格の性質だけでなく述語の意味内容も大きく関わるので、この点だけをもって二格を二分化する妥当性は低いと思われる。すなわち、下位分類する必要は認められない。

二格は、「対格性の認められない内項に動詞から付与される格」であると一様に定義することが可能である。[1] 日本語においては、空間的・抽象的な行為の向かう着点には対格性が認められないので、二格（与格）付与の対象となる。動詞からこの格が付与されると考えられる証拠がいくつか存在する。まずは、与格が対格と同じく受動化操作の対象になりうることが挙げられる。

(20)a. 生徒が 先生に 逆らう

b. 先生が 生徒に 逆らわれる

直接受動形態素 (日本語では「られ」) は動詞から格付与能力を吸収する性質をもつので、与格枠組みの動詞が受動化できるという事実は、その格が動詞から付与されるもので

あることを示している。また、与格枠組みを取る動詞が、間接受動文では対格枠組みを取りうる例のあることも証拠として挙げられる。

(21)a. 皆が 加藤さんの立候補に /?* を 反対している

b. 加藤さんが 皆に 立候補に / を 反対されている　　(杉本 1991: 236-7) [7]

間接受動文の特性についてここで詳述することはできないが、間接受動文が動詞「反対する」の argument structure に影響を与えていることは確かである。すなわち、(21a) の argument structure の段階では対格性を認められないので、動詞は内項に与格を付与する。対して、間接受動化により影響を受けた (21b) の argument structure には対格性が認められるため、動詞は内項を対格で標示することができる。このように対格と与格が動詞の語彙的な情報外の要素によって交換可能になる例が存在することから、対格と与格の区別は厳然としたものではなく、同じ格付与システムによって標示が行われていると見なすことができる。

5. 結論

移動動詞の格標示が日英語で異なる原因として、特定の argument structure に対格性が認められるか否かという対格性のズレと、'pure intransitive' の存在が挙げられることを見た。前者について：移動行為に関わる「着点」に日本語では対格性を認めることはできないのに対し、英語では対格性が認められる。このため、この構造に関わる格標示のズレは組織的・全体的に見られる。後者について：移動動詞はすべからく、場所を移動するという対他的行為と見なすことも、行為者自身に関わる運動の一種と見なすこともできるという点でニュアンスの幅を許す可能性がある。しかし、英語では、初めから後者の方に意味を固定した移動動詞が存在する。この場合、そのような移動動詞に現れる「場所」は元々余分な情報であるので付加位置に生じ、対格を付与することができない。日本語にはこのような pure intransitive が存在しないので、「場所」は全て対格で付与されうる。この存在が格標示のズレを生んでいる。対格性とは異なり、pure intransitive の存在は語彙的なものなので、ズレは例外的にしか生じない。

また、移動動詞が日本語・英語とも格標示の幅を広く認めるという傾向は Intransitivization 適用の可能性によって説明できる。もともとニュアンスに幅がある移動動詞は、Lexicon の中で Intransitivization を行うことで他動詞から自動詞へと動詞の選択特性を変えることができる。自動詞に現れる「場所」は対格付与の対象ではないので、場所格「で・から」、又は前置詞によって格標示される。従来のように、ヲ格を場所格の一種と見なす分析では、格の可変性も、ニュアンスの違いも説明することができない。しかし、この分析に従えば、そのどちらの事実についても並行的に説明することができる。

NOTES

※本稿を作成するにあたって、貴重なご指導・ご助言を下さった岩倉國浩先生、また熊谷裕司・佐々木淳両氏に感謝を申し上げる。もちろん、本稿に不備な点があれば全て私の責任である。

1. 移動動詞以外でも目的語の格標示に幅の認められる場合はある。

   (i) 親を・に　頼る

   (ii) 友達に・と　会う

   しかしながら、ここで問題にするのは、何故移動動詞に限って頻繁に格標示に幅が認められるのかということである。

2. 英語移動動詞の例の格標示の可能性は、*Webster's Third New International Dictionary* (1961) に依った。

3. 「行く / 来る」, 'go/come' は、この移動動詞のリストには含めない。これらは着点も起点も指向しうる、場所指向のない移動動詞なので、たとえこれらの「場所」に対格性が認められても実際には格付与を行うことはできず、「場所」は前置詞を伴うことでその argument structure のタイプを明示する必要があると考えられる。

4. Ritter and Rosen (1996) は、argument structure はそれぞれの動詞が語彙的に持つ意味内容からのみ形成されるのではなく、項や付加詞の情報などからも合成的に形成されるものであると主張する。しかし、ここでの議論のためには、動詞と項（場所）が移動行為の中でどのように関わり合うかという情報だけ入手できれば十分なので、彼女たちの主張するような正確な構造は考える必要がない。

   さらに彼女たちは、述語の選択する項の数や位置、その位置が固定されているかどうか、を定めるという点で argument structure が syntax に関わると主張するのみで、argument structure と格枠組みの関係については言及していない。しかし、実際にはこの点においても関わりがあると見なすことができる (Cf. 安藤 1996/ 小林 1997)。

5. 「春が近づく」 'Spring is approaching.' のように、自動詞的にこの語を使う場合も一応あるが、それでも「話し手の方に向かって」という着点指向は必ずニュアンスの中に含まれている。場所への指向が排除できないという点において、このような自動詞的用法と、Intransitivize された移動動詞の性質は大きく異なる。

6. ここで定義するのは、あくまで述語が「内項として」選択する項に付与される二格のことである。「太郎が 花子に 話しかけられる」「十時に 帰る」などは内項ではないのでここでの定義には当てはまらない。

7. 杉本 (1991) は (21a) の対格構文を '*' と判断する。しかし、実際にネイティヴチェックした限りでは、完全に非文とする者はなかったので、'?*' と判断を変えている。

REFERENCES

安藤貞雄．1996.『生成文法研究　Studies in generative grammar』　安田女子大学言語文化研究所．

Hopper, P.J. and S.A. Thompson. 1980. Transitivity in grammar and discourse. *Language* 56, 251-299.

ヤコブセン，W.M. 1989.「他動性とプロトタイプ論」久野章・柴田方良 編　『日本語学の新展開』，213-248. 東京：くろしお出版．

Jaeggli, O.A. 1986. Passive. *Linguistic Inquiry* 17, 587-622.

Katada, F. 1994. Pseudo Intransitives and Weak Transitives. In Masaru Nakamura ed., *Current topics in English and Japanese*, 53-77. Tokyo: Hitsuzi Syobo.

Kobayashi, A. 1997. Accusativity: a contrastive study of Japanese and English. MA thesis. Hiroshima University.

小池清治．1994.『日本語はどんな言語か』東京：筑摩書房．

森田良行．1988.『日本語の類意表現』東京：創拓社．

森田良行．1994.『動詞の意味論的文法研究』東京：明治書院．

Ritter, E. and S.A. Rosen. 1996. Strong and weak predicates: reducing the lexical burden. *Linguistic Analysis* 26: 29-62.

杉本武．1991.「二格をとる自動詞」仁田義雄 編　『日本語のヴォイスと他動性』，233-250. 東京：くろしお出版．

富田隆行．1993.『日本人の知らない日本語』東京：市井社．

角田太作．1991.『世界の言語と日本語』東京：くろしお出版．

Tsunoda, T. 1985. Remarks on transitivity. *Journal of Linguistics* 21: 385-396.

Webster's Third New International Dictionary of the English Language, Unabridged. 1961. Merriam-Webster inc., Publishers: Springfield, Mass.